① 毎月1回25日発行　　第3種郵便物認可（昭和35年7月26日）

山と博物館

第30巻 第5号　1985年5月25日　大町山岳博物館

鹿島槍カクネ里の春景

ミズバショウの白い花

先日、何年かぶりに居谷里湿原を訪れた。ミズバショウの花の見頃はとうに過ぎた少し暑いくらいの午後だった。

湿原の中央に流れる小川沿いの遊歩道が途切れる辺から始めて、その小川が流れ込む居谷里池までしばらく散策しようとした矢先、或る二人連れの観光客に呼びとめられた。「ミズバショウはどこにありますか。」……植物に関しては至って無知な私でも彼らの足許にたたずむミズバショウくらいは知っている。これがそれであり、花の時季は終わって、もう葉がこんなに大きくなっているのだと答えると、二人はそそくさと車へ乗り込み木崎湖方面へと林道に消えた。

「居谷里はミズバショウの白い花なのかな、それだけかな……」彼らと別れて反対方向に歩くほどに割り切れぬ思いが募った。全体のほとんどを切り捨て、或る一部分を紋切り型に対象化してしまうのは寂しい話だし、危険なことではないか。ミズバショウに限らず、特別視されたものは奇妙な価値を与えられ乱獲されかねないし、逆にその他はただの動植物だからと軽んじられ、そのことで数を減らすかもしれない。小谷では春の山の幸を「青物」と呼んで貴重な共有財産として無理な採り方を慎んでいるという。しかし村外の「山菜」採りの人々の乱獲が目にあまるようになり、とうとう村外者の入山を禁止するに至ったではないか。

こんな義憤めいたことをつらつら考えながら藪をくぐって三十分、出くわした光景は語らずして私に正解を教えていた。こもれびのさす湿地を走る一メートルに満たない小川から枝分れした更に小さなせせらぎを、ミズバショウや黄色い花の可愛いリュウキンカが縁どり、水面には小島のような苔むした数十センチの丸石が点在する。それはさながら完結した小宇宙のような光景だった。

名前をつけることのできない小さな居谷里の再発見である。

（編集部員）

鷹狩山の小鳥たち

腰原正己

大町市の東に連なっている山々は、昔から人々に親しまれてきました。特に、鷹狩山は正面に見えることや、形がはっきりしていることなどから、大町では知らない人がない程です。この山の頂は、標高一一六四メートルで、麓からの標高差が五〇〇メートルほどあります。また、尾根が張り出していたり、沢があって水が流れているなど、自然の豊かな所が多くあります。その反面、人里に近いので、木材として利用されるため伐採されて、木立のほとんどない、草やササの所もあります。

このように多くの環境を含んだ鷹狩山は、多くの種類の鳥が生息しています。麓の方では、平地の鳥であるカワラヒワやムクドリ、モズなどを見ることができますし、標高の高い方では、亜高山帯の山へ行かないと見たり聞いたりすることのできないコガラやヒガラ、コルリなども出現するのです。また、シジュウカラやヒヨドリなどの林の鳥ばかりでなくホオジロやウグイス、キジなどの草地やササなどに生息している鳥も見ることができます。その数は、五四種にのぼりましたが、これらの全てを一回で見ることはできません。普通は、近くを歩いて見ることのできる鳥は二十種程度、よく捜して三十種程度であると言われています。

鷹狩山の雪が消えて、木々が芽ぶく四月から五月にかけて、小鳥たちは子育ての季節を迎えます。気の早いエナガは、まだ、所々に雪の残る三月に、木こぶのように見える長楕円形の袋状の巣を作ります。また、カエルやヘビ、ネズミ、ノウサギなどを捕える肉食のノスリなど、ワシタカの仲間も早くから巣作りを始めます。反対に遅いのは、南から渡ってくる夏鳥です。その中でも最も遅いコメボソムシクイは、他の鳥が繁殖真最中の六月頃でも、まだ、北への旅を続けており、鷹狩山でも渡りの途中で鳴いているのを聞くことがあります。

ノスリ

鷹狩山で繁殖する鳥たちの中で、はなやかなこの季節によく似合うのは、夏鳥でしょう。声が美しく、姿や色の派手なものが多いのです。梢の上で朝日を浴びてさえずっていたオオルリは、紺と白のコントラストがとてもさわやかで美しく、ツキ（月）ヒ（日）ホシ（星）ホイホイホイと鳴くサンコウチョウ（三光鳥）は、長い尾を持った優雅な鳥です。声が美しく姿も美しいオオルリと人をひきつけるような澄んだ黄色の羽根を持つキビタキは、日本の三名鳥の中に数えられています。しかし、何と言っても、歌の名手はクロツグミでしょう。姿を見せることは少なく、白と黒の地味な鳥ですが、よく響く大きな声で、キョロンキョロン、キョコキョコ、ココケイーココケー、キャーキャーなどと二節ずつ繰り返して複雑なさえずりを何度もするのです。

派手さはあまりないのですが、数の多さからいったら、一年中山に生息している留鳥や冬になると平地におりて厳しい寒さを避け、春になると、また、山に帰って行く漂鳥が一番です。多い順にシジュウカラ、ヒヨドリ、ヒガラ、ホオジロとなりますが、これらが鷹狩山を代表する小鳥たちなのです。この小鳥たちを次に紹介してみようと思います。

シジュウカラ

最も数の多いシジュウカラは、留鳥ですので一年中見ることができます。しかし、夏や秋、冬の非繁殖期は声も少なく、チッチッやジュクジュクジュクの地鳴きがほとんどになります。いつも忙しげに枝から枝へ動き回り、一か所へ止まっている姿などは見たことがないほどです。歌は、ツウピーツウピーと澄んだ声で、移動しながらのこともありますが、多くは見晴らしのよい樹冠でさえずっています。この鳥は、頭が黒、喉から胸、腹にかけて黒い太い線がネクタイのように伸びています。背は青灰色で、頬が大きく白色なのでよく目立ちます。

巣は木の洞に作りますが、巣箱をかけるとよく入ります。山や林に近い人家の伏せておいた植木鉢に巣を作った例があるなど、適応力のある鳥です。巣を作る場所もさることながら、生息している範囲も、小さな林から太い木の林立する自然林まで広いのです。しかし、針葉樹よりも広葉樹を好む鳥であると言われています。

ヒヨドリ

小鳥の中では大きな部類に入るヒヨドリは低い山には多い鳥です。冬になると平地に漂行したり、寒い地方のヒヨドリは暖地へ渡ったりするので、私たちの身の回りでよく見られます。近年は、都会のビルディングの谷間にある小さな庭や公園でもよく見られるようになってきました。都市化するに従い、その土地から出て行ってしまった鳥がいた反面、都市の環境に積極的に入り込んでいった種類もあります。その中の重要な種としてヒヨドリがあげられているのです。

秋や春には、数十羽の群れが、南や北を指して飛んで行く姿をよく目にします。ヒヨドリの飛び方は、少しばたいては休み、またはばたいては休む特徴のある飛び方をするので、色が見えなくシルエットだけでも、それと気がつきます。

シジュウカラ

近くで見るヒヨドリは、全身暗青灰色をした地味な鳥ですので、よく見ようとする人も少ないのです。また、鳴き声もヒィーヨヒィーヨと大きな高い声でよく聞こえるのですが美しいとは言えません。そんな訳で、注目されることは少ないのですが、鷹狩山全体に分布しています。山のヒヨドリと都会のヒヨドリは、その生活や行動にどんな違いがあるのか興味のそそられるところです。尾根などの見晴らしのよい場所でさえずっているのをよく聞きますが、そんな時は、ヒィーヨヒィーヨではなく、ピョイョ、ピーヨピークリリ、ピーチュルリなどと複雑な歌い方をし、それがいつも同じ歌い方ではないのです。だから、どれが本当の歌であるのかわからないのです。

ヒガラ

ヒガラは、亜高山針葉樹林に多い鳥ですので、登山をする人には、「ちぴてえ（冷い）ちぴてえ」と鳴く鳥として、よく知られています。亜高山の渓谷を流れる冷たい水を連想させる「ちぴてえ」の聞きなしは、気温の低い時に鳴く鳥の習性と、ヒガラの高く澄んでピッチの速い声にぴったり合っているようです。

ヒガラとシジュウカラは、シジュウカラ科に属するカラの仲間です。同じ仲間ですので生息する場所が重なっていますし、鳴き声や姿がよく似ています。しかし、よく調べてみると、ヒガラの方が、標高の高い所に分布し針葉樹を好むようです。鷹狩山は低い山ですのでヒガラは多くはありませんが、それでも中腹から上でヒノキやスギの多い所には出現します。鳴き声は、シジュウカラがツウピーツウピーと鳴くのに対し、ヒガラはツツピンツツピンと高い声ではねるようにさえずります。一緒に鳴いているとその違いがわかるのですが、片方だけだと「さて、どちらかな」と迷います。また、姿も白や黒のパターンや背面の灰青色が同じです。でも、よく見るとヒガラの方が少し小型であることや、頭に冠羽を持っていること、シジュウカラのように喉から腹にかけての黒い帯の模様がなく真白であることで区別できます。

シジュウカラの仲間は、この他に、コガラとヤマガラがいます。鷹狩山では、この二つの種類は数が少ないのですが出てきます。コガラとヤマガラは、シジュウカラやヒガラと比べてわかりやすい鳥です。コガラは、ヒーホーヒーホーと笛のように美しく鳴き、ヤマガラはお腹の茶色が目立ちます。

ホオジロ

林の木が少ない所や、木が切り払われた草地、植林された木の小さい所などによく出てくるのが、このホオジロです。島木赤彦の「高槻の梢にありて頬白の　さえずる春となりにけるかも」という歌を思い出しますが、空を仰ぐように上を向き、胸をふくらませて歌うホオジロの姿が目に浮かびます。高い見晴らしのいい所で、張りのある声で歌います。「一筆啓上仕り候」とか「源平つつじ白つつじ」というように覚えると早く覚えられると言われていますが、ホオジロの歌の感じをよくつかまえた言葉だと思います。

ホオジロの仲間は、この他に、アオジとノジコが出てきます。この二種類の鳥は姿も声もとてもよく似ています。腹が黄緑がかった黄色をして、頭や背中は、黒と茶色で区別がつきにくいのですが、最もはっきり違いがわかるのは、ノジコは目のふちの回りが白くてリングのように見えますが、アオジにはそれがないことです。

託卵鳥

自分では巣を作らずに、違う種類の鳥の巣に卵を産んで仮親に育ててもらう鳥を託卵鳥と言います。大きなよく響く印象的な声で鳴くので、鳥の名前は全部がその声に関して付けられています。カッコウ、ジュウイチ、ホトトギスは、鳴き声をそのまま鳥の名前にしています。ツツドリは、ツツドリと鳴くわけではなく、ポーポーやポポポと竹筒を軽く吹いた時のような鳴き声から筒鳥（ツツドリ）と名前が付いています。

カッコウやホトトギスは平地や低い山に生息するのでよく知られていますが、ツツドリやジュウイチは深い山に棲むためか、声は遠くまでよく通る声なのですが、あまり知られてはいません。しかし、鷹狩山では、渡りの時のジュウイチとツツドリの声を数日聞くことがあります。カッコウとホトトギスの声はよく聞くことができますが、カッコウは鷹狩山の下の方で、ホトトギスは山の上の方で鳴いていることが多いです。

ヨタカ

このように鳥たちは歌を歌い、姿を目立たせているのですが、これは、自分のナワバリを作って、同じ種類の他の鳥を中に入れないようにしているのです。歌を歌って自己の存在を主張していた方が争いが少なく、ヒナを育てる上で効率がよいのです。ナワバリは、大変排他的でその中で繁殖する雌雄以外を中へ入れないのですが、ある研究者によると、種類によっては、ヒナを育てるのに、手助けをする鳥を入れているそうですから驚きです。手助けをする鳥をナワバリの中に入れる方もさることながら、親でもないのに一緒になって子育てをすることなど、とても人間臭い感じがします。鷹狩山にもたくさんいて、シイシイシイシイ……と細い虫のような声で鳴いているヤブサメでもそのようなことがあるそうですので、身近な事柄なのです。

鳥たちにとって、とても華やかな季節ですが、よく見てみると悲惨なことも多いのです。山道横の斜面に作られたオオルリの巣には、卵が四個産みつけられていました。フ化するのを楽しみにして、一週間程して行ってみたところ、巣は外に出ていて、中には何もありません。土に印されていた足跡から、タヌキなどの獣であろうと思われました。また、ソヨゴの木には、キツツキの仲間のコゲラが巣を作りました。見つけた時は抱卵中らしく、近くを通ると、穴が見つからないようにするためか、穴の所に顔をつけて穴の奥が見えないようにしていました。数日して通った時、ソヨゴの枯枝は柔らかいので、穴をこわされて、中のヒナが食べられていました。また、キジの巣を見つけた時、十一個の卵がありました。十個の卵はフ化して巣立っていったのですが、一卵はフ化したのに卵の殻から脱出できずに死んでいました。その翌日には、臭をかぎつけてきたのか、巣が荒されて食べられていました。攻撃する力の弱い小鳥は、危機一発で巣立っている場合も多いのです。厳しい自然界を生きぬき次の世代をそだてている鳥はわずかな数です。人は自然の営みを少しでも妨げることのないようにしてほしいといつも思っています。

（明北小学校教諭）

チロルの小数動物を守る

Schutz seltener Tierarten in Tirol.

ヘルムート・ペヒラーナ

今月号第四面は、去る三月二十九日当館講堂に於いて行なわれた、大町市とオーストリア・インスブルック市、当館とアルプス動物園との友好提携記念、アルプス動物園長ヘルムート・ペヒラーナさんの、スライドと映画を交えた講演会の模様を日本語訳にて一部編集の上掲載します。

ミナサマ・ヨウコソ。

チロル州の州都であるインスブルックのアルプス動物園は、今年で二十三周年を迎えます。この動物園は新しい方法に基づく動物保護、飼育を行なってきており、現代の動物園のかかえる四つの課題を自己の課題としています。

四つの課題とは、憩の場としての動物園、若者からお年寄りまでの生物学的な教養に役立つ場としての動物園、また動物学の学問的研究や自然保護の学問のための機関としての動物園づくりであります。

それとともに、アルプス動物園はテーマを決めた動物園でもあります。つまり厳密に限定された課題領域を持っているのです。課題領域の対象となっているのは、現在ヨーロッパアルプスに生息している動物及び過去千年の間に生息したことのある動物です。このことが、大町からの素晴しいプレゼントである二匹のニホンカモシカを、当園ではなくウィーンのシェーンブルン宮殿内動物園に送らざるを得なかった理由でもあります。このように課題領域を限定することにより、自然保護活動は、同時にチロルの動物の保護活動としての役割を果しているのです。

（中　略）

それでは、絶滅の危機に瀕している多くの動物達を、野生の環境におきつつ保護しようという当園の努力、業績について語ることにしましょう。

講演中のペヒラーナ氏

ハゲワシ

最初の例として、大成功例であるハゲワシに言及します。我々はアルプス動物園で一九一四年からこの鳥を飼育しており、毎年秋にザルツブルクのヘルブルン動物園に若い鳥を放しています。WWF（世界野生動物基金）との協力によって、ここにはハゲワシ生息地域が作られ、昨年すでに二番がオーストリアの山々で雛を孵しました。

ヒゲワシ

ヒゲワシに関しては、まだそれほど成功は大きくありません。この素晴しい猛鳥は数が非常に少なく、また飼育がとても困難なのです。この鳥は一番々々が一つの鳥小屋に入れられない限り繁殖しないのです。アルプス動物園ではこの鳥の繁殖の研究がなされ、飼育の方法についての論文が発表されています。現在、アルプスにヒゲワシを再び生息させようという国際的な計画が進行しており、そのためにヒゲワシをなるべく多くの動物園で飼育しようという試みがなされています。そして、十年以内に最初の若いヒゲワシがアルプスに放されることになっています。

ヒゲワシ

カワウソ

最近何年間か、アルプス動物園は特にヨーロッパカワウソの研究を集中的に行なっています。オーストリア全土でもヨーロッパカワウソは少なくなり、何匹かが残っているにすぎないので、時機を得た保護政策を行なうためにも早急な研究が必要とされています。アルプス動物園はカワウソの飼育を成功させた最初の動物園であり、直接の視察により若いカワウソの発育を正確に記録することができたのです。

ライチョウ

アルプス地方の鶉鶏類にとっても生息地域はますます限定され、人間によって変化を余儀なくされてきました。アルプス動物園は鶉鶏類の保護のために闘っています。これ以上乱獲されてしまうと絶滅の危険があるからです。例えば、アルプスで最も色の美しい鶉鶏類はアルペンシュネーフーン（ヨーロッパ雷鳥）ですが、この鳥は最近狩猟禁止となりました。また、アルプスライチョウの狩猟は制限を課され、アウアーハーン（大雷鳥の一種）も一年おきにしか狩猟が許されなくなっています。これらの領域での保護施策は、より改善されなければならないでしょう。

イヌワシ

チロル州の紋章にも使われているイヌワシもやはりチロル州では数が少なくなってしまいました。餌であるマーモットを獲ろうとすると猟師に邪魔をされ、農夫は羊を獲るというのでイヌワシを追い払うのです。しかし特別な保護措置をとったことにより、チロル州のイヌワシの状態は再び良くなってきています。イヌワシは生息のために広い領域を必要とし、他の地方に移ることをしません。

アイベックス

最近三年間にわたり、アルプス動物園はアイベックスの再生息計画に力を入れてきました。アイベックスは、一時五十頭にまで減って絶滅の危機にさらされましたが、今日ではチロル州の山々だけでも約千頭が生息するようになりました。このアイベックスは映画化され、その映画の最後でチロル州の山々のアイベックスの再生息キャンペーンを見ることができます。

アイベックスの親子

ドウモ・アリガトウ・ゴザイマシタ。

この後、約四十分にわたるアルプス動物園及びその自然保護活動を紹介した映画が上映され講演会は幕を閉じました。

山と博物館　第30巻　第5号
一九八五年五月二十五日発行
発行所　長野県大町市　TEL㉒〇二一一
大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町
大糸タイムス印刷部
定価　年額一二〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一三二九三）